

資料1 類似事例の概要

1-1 エコミュージアム事例

(出典: エコミュージアム・理念と活動 / 日本エコミュージアム研究会 / 牧野出版 1997 年)

1. 事業名称 [事例1] アイアンブリッジゴージ・ミュージアム (The Iron Bridge Gorge Museum)
2. 場所・エリア イギリス、シュロップシャー州 (Shelopsher) セバーン渓谷 (River Severn) 17 世紀の終わり頃、アブラハム・ダービー (Abraham Darby) が、木炭に代わって石炭を利用した製鉄法の実験を始めた地域。1709 年、コールブルックデール (Coalbrookdale) の溶鉱炉で石炭を燃料として鉄鉱石を溶かすのに成功。1750 年頃には、棒鉄に鍛造し得るような質の銑鉄を作りだし、鉄の大量生産が可能になる。1767 年には最初の鉄製レールが製造され、1779 年には世界初の鉄橋であるアイアンブリッジがセバーン渓谷に建設された。
3. 事業主体・運営体制 ・ アイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアム財団 スタッフは、160 名の正職員、50 名のパートタイムの職員、150 名のボランティア。プリストヒル野外博物館には、新しいニュータウンに移り住んできた老人達が昔を懐かしがり、積極的にボランティアとして参加している。 (テルフォード開発公社の役割)テルフォード開発公社は、1959 年からこの地域のニュータウン建設に携わり始めた。現在では、10 万人が居住するニュータウンに成長している。 1967 年にアイアンブリッジゴージ・ミュージアム財団が設立された時の中心的な役割を果たしたのが、テルフォード開発公社であった。さらに、プリストヒル野外博物館から規模を拡大しようとする財団に対して多くの土地を貸しているのも開発公社である。設立から一貫して土地貸与、資金援助と様々な面で支援している。
4. 事業の財源 ・総収入が 350 万ポンド。運営費のほとんどを入場料とショップの売り上げで賄っている。内訳は、入場料 40%、ショップでの売り上げが 45%、補助金が 5%、10% が寄付金である。
5. 事業の概要 [概要・経緯] (アイアンブリッジ誕生) 250 年前にコールブルックデールで開発された溶鉱炉が産業遺跡として人々に認識される。1959 年、コールブルックデール博物館が開設 (古い溶鉱炉の保存公開、鉄鋼製品の展示公開) 1967 年、アイアンブリッジゴージ・ミュージアム財団がトラストとして設立。財団は、コールブルックデールの鉄鋼産業の遺跡保存にとどまらず、周辺に広がる産業遺跡を現地で、かつ動かせる状態で来訪者に公開しようとする大がかりな取り組みを始める。地域の住民にも支持され新しい町作りへの動きとなる。 1973 年、野外博物館となるプリストヒル・オープンエア・ミュージアム (Bristo Hill Open air Museum) を設立。当時の町の暮らしをそのまま再現した。この野外博物館のオープンとともにアイアンブリッジゴージ・ミュージアムは正式に一般に公開される。 (地域に広がる博物館を演出する魅力) <u>博物館には、年間約 30 万人の人が訪れる。(約 40% は地域から訪れる人)</u> この博物館の魅力は、4km 四方に広がる各施設を一体的に博物館として展開していることである。案内パンフレットが数力国語でプリントされ、チケットはパスポート形式で、全部の博物館を一通り見終わるまでは有効期限なしというスタイルになっている。 さらに周辺のアプローチからのサイン案内が整備され、高速道路を利用する来訪者も州内に入ると必ず、アイアンブリッジをデザインした赤と白のこの博物館のサインを目にすることができる。入り口付近には無料の駐車場も整備されている。各博物館を巡るバスが運行されていて 30 ペンスのチケットで、各サイ

トから何度でも自由に乗り降りができる。また各博物館には、館の特質に合わせ、陶器のミュージアムショップやタイルのミュージアムショップがあり、どのショップにもアイアンブリッジのシンボルマークがデザインされた魅力的な商品が並ぶ。

いくつかの博物館サイトにはカフェやレストランがあり、その他にも中心となるアイアンブリッジ周辺には財団の運営するパブやレストランが立ち並んでいる。溪谷沿いの景色も美しい煉瓦作りの建物が眺められるように景観的にも細かい配慮がなされている。

(博物館の明確な基本理念と社会教育の役割)

「博物館は社会にとっての貴重な資源であり、それは、特に若い人々に対して重要なものである。このハンドブックの目的は、博物館において教師が子供達に過去の栄光をたたえ、好古趣味を促すのではなく、過去のダイナミックな産業発展の歴史や社会の変化、そしてそれが現在も続いているのだということを理解させるためのアイディアを与えるものである」

博物館は地域の社会教育の場として非常に重要な役割を果たしており、特に子供達に対する社会教育に力を注ぎ、子供用のワークシートと共に教師用のガイドブックが充実している。

博物館は1978年ヨーロッパ・ミュージアム・オブ・ザ・イヤー賞(European Museum of the Year Award)を受賞。アイアンブリッジは、1987年に世界文化遺産に指定された。

[施設概要]

現在のアイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアムは、地域の工場廃屋や住宅を次々と再生していき、5つの独立した博物館と38以上の産業遺跡や歴史的建造物で構成され、アイアンブリッジを中心に東西南北約4kmの範囲に広がっている。

ブリストヒル野外博物館(Brists Hill Open Air Museum)

約20haのこの地域に足を踏み入れたとたん、100年昔にタイムスリップしたような体験ができる野外博物館である。ビクトリア朝の街並みを歩くとオフィスや学校、パン屋や印刷屋、ろうそく工房などが立ち並び、蒸気の音や機械の動く音がする。街角のパブではビールを飲みながらイギリス料理を味わうことができる。ここでは、実際に多くの人が1世紀前の姿をして、昔ながらの材料で、昔と同じ時間と手間をかけて物を作っている。家畜も本物の豚やニワトリが飼われ、実に生き生きとした暮らしぶりを訪れた人は見ることができる。

コールポート・チャイナ博物館(Coalport China Museum)

1926年から陶器を作っていたコールポート社の工場を再生させて博物館として公開している。そこで生み出された様々な技術と膨大な製品を展示している。中では、実際に手作業で陶器が作られており、その様子を見学しながら工場内を回ることができる。

ジャックフィールド・タイル博物館(Jackfield Tile Museum)

タイル工場として使用していた建物内には、1850年～1960年の絵画を見るような装飾タイルのコレクションが並んでいる。このジャックフィールドはビクトリア朝時代の2大装飾タイルの製造地として名を馳せたところであり、ビクトリア朝時代の最高レベルの装飾タイルを見ることができる。

川の博物館とビジターセンター(Museum of River and Visitor center)

1840年代に建てられたセバーン川沿いの倉庫を改造した河川の博物館。コールブルックデール社で作られた鉄製品は、ここで船に積み、川を使ってロンドンに運ばれていった。今でもこの倉庫から川へと延びるレールを見ることができる。ここでは産業革命によって変化していった河川の歴史を公害問題も含めて現代の課題として展示している。川と水の役割について様々な問題を投げかける新しい視点を持った展示である。さらにここはビジターセンターになっており、地域の様々な情報提供を行う窓口になっている。

鉄の博物館とダービー溶鉱炉(Museum of Iron and Darby Furnace)

18世紀の鉄の歴史に画期的な変化をもたらした1638年製の溶鉱炉を掘りだし、溶鉱炉をそのまま覆うように建物を建て、保存している。その横にはコールブルックデール社の歴史と産業革命以前からのイギリスの鉄の歴史を展示した博物館がある。その他にコールブルックデール社が作った製品や時代を象徴するような鉄製品が並べてある。

<p>1. 事業名称</p> <p style="text-align: center;">[事例2] パスーセヌ・エコミュゼ (Eeomusee de la Basse - Seine)</p>
<p>2. 場所・エリア</p> <p>パリから北西へ約 130km 離れたセーヌ川河口。ノルマンディー (Normandie) 地方に位置し、プロトンヌ地方自然公園 (Parc Naturel Regional de Brotonne) をテリトリーとする。</p> <p>この自然公園は、1974 年の設立当時、35 の市町村 (コミューンと呼ばれる自治組織) がテリトリーであったが、20 年経た 1994 年には 57 のコミューンに広がり、人口約 64,000 人となっている。</p>
<p>3. 事業主体・運営体制 (組織及び管理体制)</p> <p>地方自然公園を母体する非営利団体の組織。サテライトの多くは、それぞれが管理のための協会をもつ。各協会、収集活動グループ、個人といった異なった管理体制が、1 つの連合のもとで正会員、準会員として再編された。また、考古学、歴史学、民俗学の研究機関についても、等しく準会員とみなされている。1994 年、16 の会員が構成している (正会員 6、準会員 7、準会員を志向する協会 3)。</p> <p>運営組織は、プロトンヌ地方自然公園の 1 つに組み込まれる。コンセルヴァトゥールを中心に、館長 (行政面、人事面等の管理) 職員 (サテライト職員も含む) ガイド、科学的研究者、管理といった構成にある。プロトンヌ地方自然公園における学術委員会は、パスーセヌ・エコミュゼの学術委員会としての役割も果たす。コミューンの組合は、施設の建設、修復、展示公開のための作業、PR など地域の活性化に努力している。</p> <p>(活動の運営)</p> <p>外部からの奉仕スタッフを含め来訪者は、毎日 5,000 人。年間の運営資金のうち 60% が、こうした事業活動での利益で、残りを自然公園から補助されている (1991 年)。</p>
<p>4. 事業の財源</p> <p>エコミュゼに加盟する各団体に対して、地方自然公園から規模に応じて投資がされる。この 15 年間に行なわれた投資は、総額 2,500 万フラン。サテライトの活動財源は寄付あるいは副収入 (エコミュゼのテーマに関連した書籍や物品の販売)。</p>
<p>5. 事業の概要 [概要・経緯] (設立の経緯・主旨)</p> <p>プロトンヌ地方自然公園は、人口の集中するルーアン (Rouen) とルアーブル (Le Havre) という 2 つの都市の間に線の空間をつくりたいという考えのもとで計画された。地方自然公園は観光事業によって農村地域を活性化させ、また一方では市街地の人々に対してレジャーの場を提供するという性格をもつ。その中においてエコミュゼは、地域の文化遺産を護り、地域住民の暮らしの中に伝統的な生活文化を伝えていくことに重点を置いている。</p> <p>自然公園の設立時からスタッフの中には地域の文化遺産を活用するための博物館研究者が入り計画が進められていた。経緯の中で、1 カ所に博物館を設置しては、その場所だけが活性化されるため、広域なエリアに分散しての展開を考えたエコミュゼの理念が取り入れられたのである。こうして 1975 年に、エコミュゼ開設へ向けての動きが始まった。</p> <p>エコミュゼ設置にあたり、地域住民に対してエコミュゼの概念の理解を得るために、地域の伝統・風習・農業の営みや伝統工芸など、民俗学的分野に関するアンケートの実施、資料集めといった活動も時間をかけ実施していった。</p> <p>活動から生まれてきたのは収穫・田舎の手工業などをテーマにした、住民と密接な関わりを持つ展示だった。初期には、収集品を展示する館がなかったため、教会や納屋・祭りなどの行事の時にはテントを張っての展示活動を進めた。収集品は、写真やスライドなどの二次資料が主で、内容は農村における作業 (刈り入れ・麦うち・船のお守り等) が対象となっている。同時に文書センターが設置され、収集品の整理保管の体制も整えられた。</p> <p>このような活動が常設での展示の必要性を生み、1979 年に、かつてこの地域に多く見られた木靴職人の館と、わらぶき屋根のパン焼きの館が、最初のサテライトとして完成した。</p>

このエコミュゼの注目すべき点としては、博物館研究者が中心となって実施していった資料の収集活動・展示公開活動が、地域住民への啓発となって建物修復を促し、共同体による資料館創設への動きになっていったことである。大学の研究グループやテリトリーにある共同体などの積極的な参加もあり、1983年に正式な文化省の認定を受けて、今日に活動が続いている。

(活動内容)

バスーセーヌ・エコミュゼの活動は、大きく分けて研究・保存・施設の活用・教育普及といった4つの活動が行なわれている。

(1) 研究

地域の技術文化(農業、工芸、産業に関する地域遺産)、セーヌ川の産業、特産品(麻、リンゴやその副産物)考古についての研究活動。特に環境と開発という側面から、自然公園の学際的な研究グループによってまとめられている。

(2) 保存

動産(1万点の收藏品及び借り受けた資料1万点の管理)、不動産(「パン焼き釜」「風車」などの建造物について、自然公園の建築家とコンセルヴァワールの助言のもとに再建、修復、復元)無形遺産(写真、フィルム、ビデオなどが自然公園の文書センターに集中管理)動植物(それぞれ専門的に独自の団体によって保存)の保存活動が行なわれている。

(3) 施設の活用

地域の企業・大学などとの協力のもと企画展の開催、収集した資料・書籍の貸与、研究成果である書籍の出版、サテライトの活用が図られている。1994年の時点で、20のサテライトの一般公開がされている。博物館、歴史的建造物、遺跡の小径である。

(4) 教育普及

講義、ガイドツアー、昔話の語り、民俗学の手引きなど、展示に伴う様々な活動が実施されている。他に、グループ参加や学校単位による見学の受け入れも行ない、プログラムにはパンづくりやオブジェの制作といったワークショップなどが組まれている。

以上の4つの活動以外に、エコミュゼの事業活動に従事するスタッフ養成のための「地域遺産の活用を図る職人工房」というプログラムが1984年に開始されている。また運営スタッフに対してもエコミュゼを紹介する上での研修が実施される。この養成講座のようなシステムづくりは、持続的運営を考える面、地域住民が主体となってエコミュゼの活動に参画できる面で、早期から取り組むことが必要と思われる。

またプロトヌヌ地方自然公園による観光連盟が創設されており、積極的な観光事業への取り組みがみられる。これは、エコミュゼの理念のもとに一貫した地域振興を図ろうとするものである。地域特性を反映させた商品の開発や販路の開拓、バスツアーのコースづくりや宿泊所の紹介といった事業である。フランスのエコミュゼ協会としても、毎年利用者数の統計をとり、それぞれのエコミュゼにおいて運営資金面での活性化が図られるように、改善策が考えられている。

(活動成果)

活動経過を経てバスーセーヌ・エコミュゼとして地域発展への寄与をしてきた成果を次のように挙げている。

地域における重要な動産・不動産を復興させたこと

地域資源に関する中核施設を創設したこと

思わしくない社会経済状況の中で地域経済の信用を回復するに至ったこと

共同体のイメージを多様化し博物館を頻繁に訪れる人々の層を多様化させるに至ったこと

1. 事業名称

[事例3] ベルクスラーゲン・エコミュージアム (ekomuseum Bergslagen)

2. 場所・エリア

スウェーデン。首都ストックホルムの西に位置するヴェストマンランド県、隣接のダーラナ県にまたがり、両県の7つの市町村を擁する広大なエリアで展開されている。その規模は南北約150km、東西約50kmにも及び、おそらく世界最大のエコミュージアムである。

ベルクスラーゲンと呼ばれるこの地域は、森林・鉄鉱石などの豊富な天然資源をもって、鉄製品の生産・輸出国として世界に名をとどろかせたスウェーデンにおける最初にして最も重要な工業地域であり、ヨーロッパでも最古の製鉄の歴史を誇っている。(考古学的調査によってこの地域では紀元前400年頃から製鉄が行われていたことがわかっている。)

3. 事業主体・運営体制

(エコミュージアムの運営)

最大の特徴は、その活動が1,000名近くものボランティアによって支えられている点である。このエコミュージアムは、特にコアとなる施設をもたず、ミュージアムショップも、広大なエリアを車で回る移動販売方式をとっている。

活動の推進には、各市町村、ヴェストマンランド県とダーラナ県の各県立博物館、ヴェストマンランド県観光局のそれぞれの代表者、計50名ほどからなる執行委員会が組織され、3~4名の事務局スタッフも常駐している。しかし、個々のサテライトは、自治体以外に住民や企業が所有しているケースも多く、その日常的な管理や運営については、住民や地域の歴史協会などが主体となっている。また、運営資金についても、国・県からの補助金を最大限に活用する一方、民間企業や個人の協力に負うところが大きい。

ボランティアは、若干の報酬で近隣のサテライトの管理や見学者へのガイドを行っている。スタッフはガイドを養成するための講座を開催し、誰もがガイドとして活動できるようにするとともに、担当のサテライトに関する情報だけでなく、製鉄のプロセス全般やエコミュージアム全体のシステムが説明できるよう指導を続けている。

(外部との連携)

このミュージアムは、他の施設や専門機関と積極的に連携をすることにより、活動の活性化や独創的なプロジェクトを進行させている。

例えば、遺跡の復元にはその調査・研究が不可欠であるが、エコミュージアム独自では十分な調査費用を確保できない。このような場合、周辺大学の学生にこれらの遺跡をテーマとした研究を奨励し、学生との協力によって調査・研究事業の充実を図っている。エコミュージアムの中には、歴史・科学研究センターもあり、学生たちが自由に利用できるようにしている。また、地域内の学校と共同で、児童・生徒に向けた遺跡の活用方法を研究し、現在、4つのサテライトで実験的な学習プログラムを実施している。

画家や音楽家、俳優といった芸術家もエコミュージアムに協力・参加している。インダストリアル・デザイン展の開催などを通じ、住民が芸術文化に親しむ機会、芸術家の地方における活躍の場を提供している。また、13世紀から唄われている、この地域の労働歌のCD化、在郷の5人の画家に“ベルクスラーゲン”をテーマとしたリトグラフを制作委託するなど、個性的で質の高いミュージアムグッズを開発・販売している。

(今後の展望)

ベルクスラーゲンでは、やはり鉄や産業をテーマとして地域活性化を図っているイギリスのアイアンブリッジ(The Iron Bridge Gorge Museum)、フランスのル・クルーゾ(Le Creusot)と共同で、1994年の冬に展示イベントを開催した。今後は、このような海外との協力関係も積極的に築いていきたいと考えている。

試行錯誤の中で進められたエコミュージアムづくりは、全人口が800万人ほどのスウェーデンにおいて、年間38万もの人々が訪れるようになり、観光面でも一応の成功を納めつつある。

4. 事業の財源

5. 事業の概要

[概要・経緯]

ベルクスラーゲン・エコミュージアムは、スウェーデンの代表的な産業であった製鉄に関わる遺産を保存・整備・公開している「鉄の歴史」をテーマとしたエコミュージアムである。

(設立の経緯)

1850 年頃まで、スウェーデンは世界で有数の重要な鉄製品の輸出国であったが、今世紀の初頭から製鉄業にかげりが見えはじめ、今日では国内でもわずかに数カ所しか鉱山を見ることができない。

ベルクスラーゲンにおいても、1970 年代より首都への人口流出が進み、地域の活力が衰える中、その歴史的な遺産をどう保護していくのが問題になった。両県の博物館のスタッフが住民とともに、古い農場や製鉄所跡、鉱山跡地を破壊せずに、どのような形で保存するのかという議論を進めた結果、1981 年からエコミュージアムの発想が導入されるようになった。

1986 年、7 つの市町村にまたがる広大なエコミュージアムが誕生し、1991 年より専属スタッフを迎え、本格的な活動をスタートさせた。

(目的と活動)

製鉄業に従事する人々を、この地域では尊敬の念をこめてベルクスマン (Bergsman) と呼んだ。ベルクスマンは、世界を席巻するスウェーデン鉄鋼の担い手であり、地域文化を牽引する人々でもあった。

人々の郷土に対する誇り - ベルクスラーゲン・エコミュージアムは、その目的の第 1 に地域アイデンティティの回復を挙げている。住民自らが郷土の歴史・文化を知ることを通じて、再び郷土への誇りを取り戻し、郷土に対する愛着を高めていくことを目指して、その実現のために次のような活動を行っている。

地域文化活動に参画する。

地域の歴史・文化に関わる情報を提供する。

(地域の人のために、そして、ともに活動する(住民の参加がエコミュージアムの活力となる))

見学コースの設定や各種セミナーの開催。

人文学的な見地から技術をとらえる。

国内の他の地域や外国からの訪問者に対してベルクスラーゲンの魅力を紹介し、文化的な観光事業の促進を図る。

地域の自然・歴史・文化遺産の保護。

[施設概要]

もともとあった見学施設や小規模な博物館に、新たに改修・復元した様々な時代の産業遺跡(鉱山製鉄所、製鉄所主の館、鉄道、発電所、運河など)を加え、現在 52 カ所がサテライトとして指定されている。これらは、コルベックソン川の水系に沿ったこの地域の中に点在し、ストラームスホルム運河によって結ばれている。

フログベルイェートの鉱山 No.14 Grube Flogberget

1918 年に閉山した鉱山跡に大規模な改修を行い、一般公開している。鉱山地区の長さは 350m、幅は 45m ほどあり、様々な大きさの立抗が 15 ほどある。見学者は、通路で結ばれたいくつかの露天掘りエリアを歩くことができ貴重な宝物(鉄鉱石)を山から取り出そうとした先人たちの知恵と努力、様々な採鉱の技術にふれることができる。現在はフログベルイェート地域の所有になっており、夏季に限りガイドツアーが実施されている。

ニア・ラップヒッタン No.28 Nya Lapphyttan

ニヤ(新)ラップヒッタンと名付けられたこのサテライトは、1980 年代にラップヒッタンで行われた発掘調査に基づき、中世(12 世紀末以降)の製鉄の村を復元している。発掘現場とは別の場所で復元することにより、遺跡の考古学的価値を損わないよう考慮したものである。現在、ラップヒッタンの遺跡も別途のサテライトとして保存されている。

エンゲルスベルイの製鉄所 No.31 Engelsbergs bruk

エンゲルスベルイの製鉄所は、産業革命初期の姿を現在に伝える、世界で最も重要な遺跡の 1 つに位置づけられており、1993 年、ユネスコにより世界遺産に指定された。ここの溶鉱炉と鍛冶場は、

動力となる水車、粉碎機やふいご、ハンマーが今もなお正常に稼働できるように整備されていることが大きな特徴となっている。サテライトの担当ガイドによって、貯水池の堰が開かれると、巨大な水車が水しぶきを上げてなめらかに回転し、見学者は、現在も生き続ける近代の工場の息吹を感じ取ることができる。

製鉄所の周辺には、1700年代に建設された領主の館の他、村の通りに沿って、倉庫、牛小屋、豚小屋などの農場の建物、製鉄所の元事務所、従業員の宿舎などが保存されている。庭園を介して渡れるようになっている領主の館は、母屋を中心に、別棟・円塔の東屋が左右対称に配置された、スウェーデンの伝統的建築様式をもった建物である。

ファナ領主館 No.41 Farna Manor

ファナ工場用地跡に残る領主の館。ファナの製鉄業は1607年、ハンマー1つと鍛冶場2つという小さな規模でスタートし、その後、国内最大規模のトラストとして成長した。館は歴代の製鉄所オーナーの所有物となっている。製鉄所の遺構として現在残っているのは、かつての建物の基礎部分だけであるが、領主の館は最後に改修された19世紀当時の優雅なたたずまいをみせている。現在は、スウェーデン王室の秋の行楽用ホテルとして利用されている他、一般の宿泊や会議・セミナーなども受け入れている。

カルマンスボ工場集落 No.42 Karmansbo bruksmiljo

1958年まで生産を続けた、この地区最大の製鉄工場とその関連の施設（製鉄工場主の館、労働者の住居、鍛冶場、圧延工場、事務所）などが保存されている。

工場近くには、今世紀初頭に建てられた従業員住居が、初代居住者の台所や調度品とともに残されており、当時の労働者たちの生活を伺い知ることができる。夏季にはカフェテリアとして活用されており、当時の居住者の孫に当たる住民が、その運営・ガイドにあたっている。

運河博物館 No.48 Skanzen kanalmuseum

ストラームスホルム運河の水門近くある元の運河オフィスをはじめ、隣接する建物によって運河博物館が構成されている。鉱山労働者の生活様式の再現や地方の伝統工芸に関する展示、水門や運河に浮かぶ船の模型の展示もあり、18世紀に敷設されてから、今日に至るまでの運河と運河沿いの地域の歴史を知ることができる。

<p>1. 事業名称</p> <p style="text-align: center;">[事例4] 街は博物館構想 - 新宿区ミニ博物館</p>
<p>2. 場所・エリア</p> <p>東京都新宿区</p>
<p>3. 事業主体・運営体制</p> <p>(組織体制)</p> <p>すべてのミニ博物館を把握し、「街は博物館構想」を推進していくのは新宿区であり、直接の担当は新宿歴史博物館である。新宿歴史博物館の職員構成は館長以下、管理係と学芸係に分かれる。管理係は、区内の文化財に携わり、学芸係は博物館業務を担っている。各係に学芸員がいるが、ミニ博物館を担当しているのは管理系の学芸員である。この管理系の学芸員は、新宿区の文化財行政に携わっている。</p> <p>また、各ミニ博物館には、その所有・設置者である館長がいる。各ミニ博物館の管理運営や活動等は、区が取り決めたことを除いては、各ミニ博物館の館長に一任されている。</p> <p>(管理運営)</p> <p>ミニ博物館開館後の管理運営は、各ミニ博物館の館長に任されている。特に開館日・開館時間などは、各館の要望が反映されている。</p> <p>補助金以外には、区は各ミニ博物館の案内解説リーフレットを、毎年5,000部ずつ各館に配布している。これには各館の開館日時、住所、連絡先、周辺地図の基本的な情報のほかに、ミニ博物館の概要が載っている。このリーフレットは、詳しい解説の役割も果たしているため、これがあれば見学の大きな助けとなる。また、各館には、区が開館時に準備したオリジナルのスタンプが設置されており、このリーフレットはスタンプノートとしても活用されている。</p> <p>(事業活動)</p> <p>事業活動は、各ミニ博物館の自主性により行われている。</p> <p>[2 館の事業活動例]</p> <p>染の里 二葉苑</p> <p>年に2回、春と秋に「千色会」というイベントを開催している。これは、地元の人々に近所に染色業の作業場があること、伝統工芸の染色を知ってもらうことを主な目的としている。近所の各戸にちらしを配布、以前に来館した方には案内葉書を送るなどの広報を行っている。「千色会」では、染色体験、職人仕事の実演、講演会などが行われている。</p> <p>また、月に4~5組の新宿区立の小学校の団体見学も受け入れており、作業の忙しくないときは、解説して案内をしている。</p> <p>ここでは、特に地元(新宿区)の住民に江戸染色文化を理解してもらうことを第一義として、イベントなどを開催している。</p> <p>つまみかんざし博物館</p> <p>半年に1回の展示替えを独自に行っている。その際には、企画展のリーフレットも作成している。閑散期には、つまみかんざし教室も開催されている。また、「江戸東京博物館」の体験講座などで講師を引き受けたり、海外で企画展を行ったりと、ミニ博物館以外でも伝統工芸の普及に、積極的に取り組んでいる。</p> <p>ここでも、つまみかんざしを少しでも多くの人に知ってもらいたいという志から、事業活動を展開している。</p> <p>ミニ博物館は、自由に出入りできる館がほとんどであり、来館者数等を把握するのは難しい。この2館では任意に来館者名を記帳してもらっており、イベントなどの案内を送っている。つまみかんざし博物館では、展示替え毎に来館する固定ファンもいる。</p> <p>(広報)</p> <p>新宿区としては、各ミニ博物館の事業活動について補助金等の援助の制度はないので、新宿区広報に、その情報を掲載するなど広報面での支援を行っている。</p> <p>ミニ博物館開館後の広報は、主に新宿区広報によって行われている。ミニ博物館新設オープン、イベント等活動のある時、休館のお知らせは、区報を通じて行われている。</p> <p>新宿歴史博物館が発行している「新宿区史跡めぐり地図」(1部250円)には、他の文化財と一緒にミニ</p>

博物館の所在地と概要が掲載されている。史跡めぐり地図には、10の史跡めぐりコースがモデルコースとして設定されていて、ミニ博物館もコースの中に入っている。

また、新宿区観光協会発行の「新しい都心新宿区 歴史のある街のガイド」(無料)にも、他の庭園、公園、博物館、記念館や文化財とともにミニ博物館の所在地と概要が紹介されている。

4. 事業の財源

「ミニ博物館設置及び運営事業補助金交付要綱」に、補助金や運営についての条件(約束事)がある。区の補助金は、設置時に改修工事費として、最高限度額500万円、その後は月1万円の管理運営費を年度末に一括して補助する仕組みとなっている。

また、入館料は無料、区民が気軽に入れ、見学できる場所であること、原則として補助金交付後5年間は運営を継続すること、展示の主たる目的が営利等でないことなどが設置の条件となっている。

5. 事業の概要

[概要・経緯]

「街は博物館構想」とは、区内に散在する歴史的、文化的資産を保護・活用し、あわせて広く知ってもらうことを目的に、区全体を生きた博物館とする事業である。

「ミニ博物館」とは、この事業において、区民の協力を得ながら、文化財や史跡、伝統産業を担っている職人の仕事場などをその建物の一部を改修・整備し、展示・公開しているものである。ミニ博物館の設置は、区民が気軽に観賞できる博物館として、より地域の特性を高め地域文化の核として地域社会の文化活動の活性化を図ることを目的としている。

平成4年3月9日(平成3年度)に1号館が開館し、現在(平成8年9月)までに6館が開館している。今後も随時開館していく計画となっている。

[施設概要]

染の里 二葉苑

「染の里 二葉苑」は東京染小紋、更紗染めを中心とした染色業を営んでいる。その作業場に見学コースを設け、作業の様子を公開している。また、各作業工程が分かる展示、白い絹布が染色され完成するまでの全行程や道具類の展示、製品の展示も行っている。

須賀神社と三十六歌仙絵

区指定文化財の三十六歌仙絵は、四谷の総鎮守として信仰を集めた須賀神社の隆盛を物語るものである。これは社殿内に掲げられており、普段は公開されていないので、この三十六歌仙絵に和歌の詠みを加えたものを写真パネル化して境内に展示している。

つまみかんざし博物館

つまみかんざしは、小さく切った布(羽二重)をピンセットで折りつまんで花や蝶などのかんざしに仕立てたもので、東京都の伝統工芸品に指定されている。

このミニ博物館は、そのつまみかんざしの職人の作業場を公開し、作品の展示も行っている。

十二社熊野神社の文化財

熊野神社は、区指定文化財4点をはじめ多数の文化財を所蔵している。錦絵や写真を掲示した説明板で十二社と熊野神社の歴史や風土を紹介している。

内藤新宿 太宗寺の文化財

図や写真を掲示した説明板で、内藤新宿と太宗寺の歴史を紹介している。

また、所蔵の文化財(都指定1件・区指定6件・区登録1件)が見学できる。

目白学園遺跡

目白学園一帯では、発掘調査で縄文時代から奈良時代までの各時代の集落跡や遺物が多数出土している。目白学園内に以前からある出土品資料室と縄文時代の復元住居をあわせてミニ博物館として公開している。

富田染工芸

また、さらに染色業を営む「富田染工芸」が7号館として開館する予定である。